巻頭言

新しい育林[redacted]技術への期待

阿部　豊

昨年来，急激に悪化した北海道林産業界の不況は，かなり深刻な様相をおびて本年に引きつがれている。国有林および道有林の4回にわたる原木価格のあいつぐ引き下げをもってしてもこの構造的な不振は簡単に脱出できないところまでおちこんでいる。

北海道は本州と異なり外材輸入がふえたとは言いながらも，まだ素材全需要量の20%程度で外材が過半を占めている本州とは比較にならない状態で，林産加工の中心となっているのは依然として道産材である。

林産業界の不況は全国的な現象であるが，とくに本道の場合は一層，深刻なものがあるようである。この原因としては対米輸出合板の不振や木材価格の上昇が高級材にかたよっていること，あるいは本道における流通販売機構の不備であるとか，いろいろな原因はあげられるにしても結論的に言えることは，道産材を原料として使用しているために，主として外材に依存している本州業界よりも苦境におちいっているということである。単純に言いかえれば現状においては，木材工業の原料として外材を使った方が有利であるということに外ならない。

このような背景のもとに北海道の林業経営はどうあるべきか，また将来の本道森林をどのような方向にすすめていくべきかを考えるとき，われわれ林業技術者は多くの困難な問題点をかかえていることに改めて気付くのである。国有林，道有林の場合は別として民有林については全く自らの努力によって，これからの道を切り拓いていかねばならない。

今後における木材の需要構造について数十年にわたる長期的な予測をたてることは困難であるが，北海道の森林資源の現況をもとにして考えた場合，少なくとも低質材生産を目標として施業を行なっても，経済的にひきあわないことが十分予想される。

民有林の主要樹種としては，カラマツがまず第一にあげられるが，今迄のようにカラマツを25年未満の低伐期で伐採してパルプ材や坑木，あるいはよくても押角程度の製品生産にとどまるようでは，今後のカラマツ造林に大きな成果を期待することは難しい。さらに付加価値の高い製品の生産を併行して検討すべきであり，そのための育林技術の確立が急務である。

最近，とくに強調されその範囲が大きくひろがってきた森林の公益的機能の問題については大部分が里山である民有林にとって，この面からの要請も強く出てくるものと思われる。本州の有名林業地のように数百年の歴史と伝統につちかわれた優秀な技術をもたない北海道の民有林にあっては，本道独自の立地環境に立脚し，しかも森林のもっている直接，間接の効用を十分に発揮できるような新しい林業の経営技術を，一日も早くつくりあげることが北海道の民有林を安定にみちびくために是非とも必要である。

（場長）